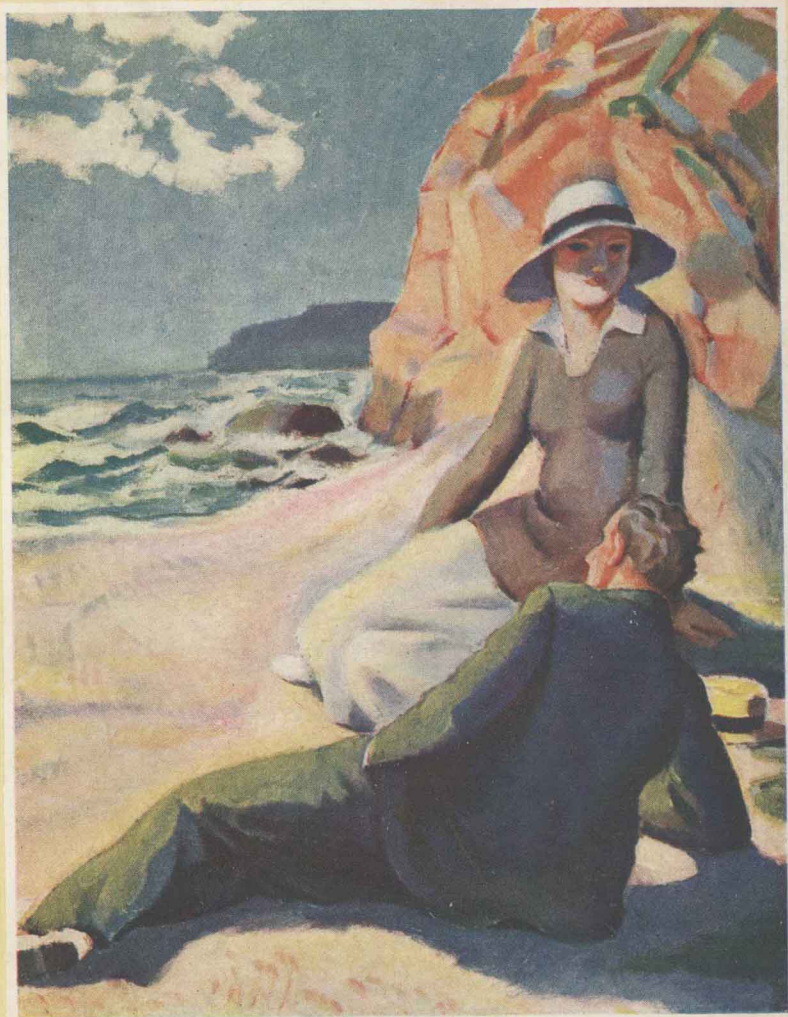




DIE BUDDENBROOKS
VON
Thomas Mann

作　　ン　マ・ス　マ　オ　ト

家一クオロブンデッブ

— 1 —

譯　極　無　瀨　成

版　出　社　潮　新

非賣品

第二期

世界文學全集(11)

ブッデンブロオク一家

第十六回配本

昭和七年二月廿三日印刷
昭和七年二月廿九日發行

翻譯者 成瀬無極

發行者 佐藤義亮

東京市牛込區矢來町

發行所 新潮社

電話牛込

八八八八八
〇〇〇〇〇
九八七六五
番番番番番

振替東京 二三、四五〇番

東京市小石川區西江戸川町 富士印刷株式會社印刷

解 説

トオマス・マンとその作品

——特に「ブッデンブロック一家」に就いて——

トオマス・マンは獨逸の自由都市リューベックの豪商、元老院會員ヨハン・ハインリヒ・マンと、その妻ユリア・ダ・シルヴァ・ブルーンズとの間の次男として一八七五年六月六日に生れた。母はブラジルの首都リョ・デ・ジャネーロの生れで、彼女の父は獨逸植民地の地主であり、彼女の母はポルトガル系のブラジル人で七歳のとき獨逸へ移住したのである。ユリアは際立つたラテン型の女性で、若い時には美人の聞こえ高く、非常に音楽的であつた。されば、ゲーテの場合と同じく、トオマス・マンも亦「眞面目な生き方」を父から、「快活な心」を、即ち藝術的・官能的傾向を、そして就中「説話の興味」を母から傳へられたのである。男三人、女二人の五人同胞で、壯麗な市中の邸宅に生ひ立ち、また父方の祖母が住んでゐたマリア教會附近の、今日「ブッデンブロックの家」として市の名物の一つになつてゐる舊家を第二の家庭としてゐた。少年期の最も楽しい思ひ出はオスト・ゼエに臨むトラウヴェ・ミュンデの海水浴のそれであつて、美しい保養館の音楽や豊富なタープル・ドオトの食事から別れるのが何よりも辛かつた。之に反して學校はトオマスの喜びではなく、校規も教師も輕蔑と反抗の對象となり、出来るだけ課業を怠けて、靜かな讀書に耽つた。彼れの一生を通じての懶惰がこの時分から既に始まつてゐたのだ。商人として、恐らくは商會の後繼者たるべく定められて

ゐた彼れはレアル・ギュムナジウムに通はされたが、最上級へ進む資格すら得ないで了つた。この間に諷詩モヤンツエを作つたり、同胞きょうだいを相手に自作のドラマを演じたり、後ちに小説「トニオ・クレエゲル」の中に出て来る友人ハンス・ハンゼンに寄せる詩を作つたりした。このハンスといふ人物は晩年酒に溺れて、アフリカで悲惨な最後を遂げたが、彼れが戀愛の詩歌を捧げた寓色の垂髪の少女はどうなつたであらうか。トオマスが小説に筆を染めたのは餘程後のことで、上級生中の叛逆兒達と一緒に發行してゐた「春のあらし」といふ廻覽雜誌の同人中では主として、哲學的評論家として牛耳を執つてゐた。そして、實際彼れは今日まで創作の合間に絶えず評論を書いて來たのである。彼れの十五歳の時、まだ比較的若い父は敗血病で死んだ。父は聰明な端正な紳士で市の名望家であつたが、晩年には家業に對して餘り喜びを見出さなくなつてゐた。そして、父の死後間もなくこの百年以上の歴史を有する穀物商會を閉店してしまつた。その後、母は南方への憧れからミュンヘンへ移り、トオマスも學校の課程をどうにか片附けてから同市へ行き、一時、或る火災保險會社の見習員となつた。雜誌「社會」ゲゼルシャフトに戀愛小説を掲げてリヒャルド・デメルに認められたのはその頃である。そして一年後には「ジャーナリスト」になる目的で母からミュンヘン大學及工科大學へ入學する許可を乞ひ得て、史學、經濟學、美術史、文學史等に關する講義を聴き、一方大學演劇團へ入會し、若い藝術家から成るカフェー黨へ參加した。イブセンの「野鴨」が上演されたとき、エルンスト・ウォルツォーゲンが老エクダールに、トオマス・マンが豪商ウエルレに扮した。やがて、彼れよりも四歳年長の兄ハインリヒに招かれて羅馬へ遊び心ゆくまで自然と藝術とを味つた。ハインリヒは始め畫家を志し、伊太利の明るい空の下で畫筆を動かしてゐた。一方、トオマスは其の煙に包まれて北歐及露西亞の文學に親み、最初の短篇集「小さいフリーデマン君」を著はした。この二人の兄弟は後年相並んで獨逸文壇に盛名を馳せたが、種々の點で對蹠者の地位に立ちその間は圓滑に行かなかつた。兩親の異

つた性情が、それぞれ別趣に分配せられたのであらう、「政治的と非政治的、諷刺的攻撃家と反語的造形者、南方的と北方的」の對照がマン兄弟の間に認められる。藝術の種類から云ふとハインリヒは劇詩的、トオマスは叙事詩的である。表現主義の時代にヴェーデキントと並んでハインリヒが若い作家たちから先輩と仰がれたのも偶然ではない。

さて、「ブッデンブローク一家」も亦伊太利で着手せられた。實際、物になるかどうか、あまり自信は無かつたが、若い詩人は生來の粘り強さでゆつくり筆を運んで行つた（この粘液質の裏面には抑制された神經質が隠れてゐるのかも知れないと、彼れ自身が言つてゐる）。かうして約一年の後、彼れは恐ろしく嵩高な原稿を抱へてミュンヘンへ歸つた。そして下宿の一室で根氣よく書き續けた。同時に諷刺雜誌「ジムブリチッシュムス」の編輯に従事し、月額百馬克の手當を支給された。やがて、彼れは「ブッデンブローク一家」の一部分を文士アルトゥール・ホーリッテールとカルト・マルテンスとに讀んで聞かせた。後ちに共產主義者となり、日本へも來遊したホーリッテールはこのブルジョア一家の没落史に餘り興味を牽かれなかつたが、「現代獨逸文學」の著者マルテンスは口を極めて讃嘆した。若い詩人は夙にニーチェの文體と思想とに影響せられ、この偉大なモラリストの非道德主義（イモラルイズム）に於て「克己」の精神の發現を見た。また、トマス・ブッデンブロークの場合のやうに、彼れは偶然ショーペンハウエルの著書を買ひ入れ、長いこと棄てておいたが、二十代になつて再び之を手にする機縁に逢著するや否や晝夜を分かたず一心に讀み耽つて一種の形而上學的陶醉に陥つた、それは遅い「春の眼覺め」と少なからぬ關係を持つものであつた。この哲人の思想は、例へばトーマス・ブッデンブロークの死の豫感（第七部第六章）の中に悲しいメロヂーとなつて微妙に織り込まれてゐる。

「ブッデンブローク一家」は約二年中の、屢々中断せられた勞作の後、世紀の轉換期に完成した。原稿を伯林のフィッセル書肆へ送るとき、彼れは誤つて熱い封蠟を手の上へ落としてひどい火傷をした。原稿は頗る亂雑なもので、兩面

に書かれてゐた。初めは淨書するつもりだったが、あまり分量が多いので見合はせたのだ。たつた一つしか無い原稿なので保険を附けることにして「原稿」と誌した傍へ價格「一千馬克」と書いたら郵便局員が微笑を洩らした。それもその筈である、作者はわづか廿五歳の青年なのであつた。書肆はこの尠大な小説の出版を勿論幾度か躊躇したが、恰も一年志願兵として入營してゐた詩人が兵營内の病院から頼へる鉛筆の走り書きで斷然短縮の不可なる由を書き送つたので、つひに一九〇〇年の末に、一九〇一年出版として、假綴二卷十二馬克で發賣した。殆ど無名と云つても宜い青年作家の「砂を噛む荷車」のやうにテムボの遅い小説は當然默殺の運命に逢つたが、それでも一年間に第一版の千部だけは捌けた。それが、一たび、フレンセンの當り作「イェルン・ウール」の例に倣つて一巻物五馬克に改めて世間へ送り出すと忽ち内外の耳目をあつめ飛ぶやうな賣れ行きで、作者は一躍世界的名聲を博した。彼れは、その後二度までかうした喝采の嵐の中に立つた、一度は五十歳の誕辰に際してであり、他は先年ノオベル賞金を授與せられた時である。しかも、瑞典の學士院が詩人を推薦したのは、勿論彼れの文學的業績一般を考慮してのことではあるが、主としてこの北方獨逸自由都市を舞臺にした出世作に對する同感に依ると云つて宜いのであるから、「ブッデンブローク一家は「トニオ・クレエゲル」と共に詩人の内面生活に最も密接な關係を持つてゐると同時に、彼れの文壇的位置を確立し、且之を世界的ならしめた最初の作であつて、近年の大作「魔の山」と共に作者のライフ・ワークの一つだと云ふ可きである。

作の内容については、拙譯ながら作物そのものを提供してある限り、讀者諸君の理解と判斷とに一任すべきものと思ふが、譯者の義務として簡單に解説めいたものを附け加へておけば、この作は一面作者の自叙傳とも見られ、この意味で、ゲーテの「キルヘルム・マイステル」やケルレルの「綠衣のハインリヒ」などと比較せられる、そして、他面十

九世紀後半に於ける獨逸ブルジョアの崩壊をブッデンブロークなる豪商一家の運命に依つて描き出してゐる點で、フライタクの「借り^{ブルジョア}と貸し^{アノ}」や、規模は違ふが、「祖先^{アイネン}」などと同じく階級的又は文化史的小説と呼ぶことが出来るのである。そして、作者の内面生活の反映といふ視點からすると、「ブルジョアと藝術家」との相克が中心問題を形づくつてゐると思ふ。作者もまたその不幸な妹カルラのやうにブルジョアの家に生れて、その階級から背き去つた叛逆兒なのである。勝れて美しいこの女性に誤つて劇界へ身を投じたが結局幻滅に終り戀愛の縛れから毒を仰いだのである。然し、この作で最も推稱すべきものは「人間」を立體的に刻み上げる力だと思ふ（作者は伊太利で繪畫よりも寧ろ彫塑に心を牽かれた）。作中の數多い人物は今日に於てもなほ生きて呼吸してゐるやうに感ぜられる。そして、この生きた塑像の周圍にそれぞれ一種の音樂的情調が漂つてゐることも亦見逃がせない。それは、「トニオ・クレエゲル」、「ヴェニスにての死」、「魔の山」などに於いて感ぜられるトオマス・マンの「音樂的」素質の現はれであつて、それが彼れの作品の持つ大きな魅力の一つになつてゐることは疑ひを容れない。

エレッセルの言葉を藉りて、作中人物のスケッチを試みると、まづ老ヨハン・ブッデンブロークは十八世紀の色彩を帶びた啓蒙主義者で、その子のコンズル・ブッデンブロークは商工業的施設や關稅同盟などに同感を持つ進歩主義者であり、同時に、敬虔主義的のコンズル夫人に感染して幾分宗教惑溺的傾向を示してゐる。彼れはブルジョアであつて、また基督教徒である。この二人は、寧ろ過去の時代に屬してゐるが、各時代の子として、それぞれ立派に生きてゐる。次に、ゼナートル・トーマス・ブッデンブロークこそは、この筋の無い小説の中で疑も無く主人公の位置を占めてゐる、或は少くとも一人の主人公である。彼れは過渡期の人物として、自我分裂的性格として描かれてゐる義務觀念と責任感と名譽觀念とが彼れをブルジョアの因襲へ縛りつける。然かも、彼れの心の一隅には藝術的意識が潜在してゐるのだ。ミュー

セーの所謂「二人の人間」が彼れの内に住んでゐて、一人は行動し、一人は觀照する、ブルジョアの世界では虚飾的な「變り種」であり、弟クリスチアンに云はせれば冷刻な利己的な俗物である。彼れはイブセンの描いた「笑へぬ人」ロスマルの倅を持つてゐる。その妻ゲルダはヴァイオリンの名手で北歐型の美人であるが、ブルジョアの生活零團氣とはそぐはない上品さと冷たさを持つ一種異様な存在で、トーマスが彼女に對して懷くものは親愛の情といふよりも寧ろ畏敬の念に近く、彼女の藝術に感激しつつも彼女の眼に映ずる彼れは畢竟遺傳的に非音樂的なブッデンブローク家の子に過ぎないのである。そして、二人の間に生れた小さいハノオに至つては縹渺たる蜉蝣的生命で、初めから實生活に堪へる力を缺き、「ファウスト」の中に出て来るホムンクルスのやうな譬喩的人物に對する感を懷かせる。彼れは「幽霊」のオスワルドや「小さきアイヨルフ」の主人公と比較せらるべき犠牲的人物である。ハノオの夭折はこの由緒あるブルジョア一家の没落を告げる悲しいフィナーレとなつてゐる。

トーマスの弟クリスチアンは實行に生きるブルジョアの血から生れ出た藝術的デレタントであり、身心共に頹廢した「悲しい道化役者」のタイプとして極めて鮮かに描き出されてゐる。作者はかうした反語的人物とでも稱すべき性格を描く非凡な手腕を持つてゐる。この點はイブセン、チューホフ、ヴェーデキンドなどと共通である。全然性格を異にしつつ、然かも相互に全然無理解ではないトーマスとクリスチアンとの關係に於て、同胞憎惡の契機が用ゐられてゐる。弟は實生活に於て斷然優越者たる兄を憎み、兄は自分の心の底に潜む藝術的人間のカリカチュアとしての弟を輕蔑してゐる。クリスチアンはまたブルジョアジーへの叛逆者たる作者の自嘲の現はれとも見られる。トーマスとクリスチアンとの激論の場面(第九章)はこの意味で、作者の内に住む二人の人間の争ひを描いたものだとも云へよう。

最後に「ブッデンブローク家の娘」として最後まで生き残るトオニーがある。この女性の運命だけを取り離してみる

とこの作は一つの「女の一生」であつて、この女性が多く読者の同情を呼び、この作の重なる牽引力となつてゐることは疑ひを容れない。エレッセルは彼女をマダム・ボヴァリに比して遜色の無いものだと言つてゐる。彼女のプライド、彼女のヴァニティー、そして彼女の純真、悉く正眞である。「トオニー・ブッデンプロオクは兄のトーマスと小さいハノオより後に生き残る、そして彼女は今日もなほ生きてゐるのだ。」二十五歳の作者は何處からかうした女性を連れて來たのであらうか。女優になつて失敗し、悲慘な最後を遂げた姉妹はトオニーとあまり共通點が無いやうだ。或は、不思議なことに同じく自から命を絶つたといふもう一人の姉妹にその儚が宿つてゐるのであらうか。それはともかくこのトオニーこそ作者が最も深い同情を以て描いた人物であらうと思はれる。

「ブッデンプロオク一家」以後の作者の閱歷と詩作とに就いては最早詳しく語る餘地が無くなつた。簡単に云へば、彼の道は向上と榮譽とのそれであつて、一作毎に文名は舉り、家庭生活も亦極めて平和な幸福なものであつたやうだ。作品の中で特に好評を博したのは「皇子殿下」「ヴェニスにての死」「トニオ・クレエゲル」、及び最大長篇「魔の山」である。「魔の山」を書いた動機は、夫人が肺炎加答兒を患つて一九一二年以來幾箇月かを瑞西の高地療養所で送つたとき、詩人も三週間ほどダーヴォスに滞在して親しくその特異な自然と生活と人間とを觀察し、諷刺的な短篇小説の材料にしようとしたのに在つて、それが千數百頁の大作になつて、しかも發表と殆ど同時に匈牙利語に譯され、續いて和蘭、英吉利、瑞典、佛蘭西等の各國語に移され、世界的センセエションを捲き起こさうなどとは全く豫期されなかつたのである。彼れが云ふやうに、それは作物そのものが持つ意志がさせる事柄であつて、近作の「マリオと魔法師」の如きも一寸した海邊の暇つぶしから生れたものだと言ふ。最近彼れの眼は東洋へ注がれ、埃及とパレスチナを舞臺にした小説を書かうとしてゐる。彼れに於ても亦ゲーテの場合のやうに東西兩洋が幸福に結合せられるであらうか。

因に、彼れの様式と作風とには英國作家の影響が認められると云はれてゐたが、「魔の山」の如きは全然比類の無い作物だとアンドレエ・ヂイドが評してゐる——“Cette oeuvre Considerable n'est vraiment comparable à rien.”

この譯は、一九〇九年の第四十四版本を土臺として全集版、大衆版を參酌し、H. T. Lowe-Porter の英譯本を隨時參照してなされたが、一種獨特の文體ではあり、また多くの方言が交つてゐて意外の困難に逢著した。殊に非常な長篇で、つひに一巻に収め切れなくなり、二巻に跨ることになったのは遺憾である。語學的には可なり正確を期したつもりだが、譯文を洗煉する餘裕が無く、或ひは冗漫に流れ、或ひは生硬に失したのは慚愧に堪へない。英譯者の言葉を藉りれば、この譯本は「謙遜を以て」提供せられるのである——“So let present translation is offered with humility.”

最後にトオマス・マンの主な著作を掲げる——

- (一) 短篇集——「小さいフリーデマン君」(Der kleine Herr Freidemann)「トリスタン」(Tristan)「神童」(Das Wunderkind)
- (二) 小説——「ブッデンブロッカー家」(Die Buddenbrooks)「皇子殿」(Königliche Hoheit)「ウニムジの死」(Der Tod in Venedig)「魔の山」(Der Zauberberg)「無秩序と夙き悩々」(Unordnung und frühes Leid)「ペリオと魔法師」(Miris und der Zauberer)
- (三) 戯曲——「フィオレンツァ」(Florenz)
- (四) 牧歌——「あるじと犬」(Herr und Hund)「そなたのうた」(Gesang vom Kindchen)
- (五) 論文と講演——「フリードリヒと大聯盟」(Friedrich und die grosse Koalition)「非政治的人間の感想」(Betrachtungen eines Unpolitischen)「講演と答辯」(Rede und Antwort)「努力」(Bemühungen)「巴里の釋明」(Pariser Rechnungen)

enschaft」「今日の要求」(Die Forderung des Tages)〔以下雑誌「Neue Rundschau」所載〕、「現代に於ける獨逸文士の職業に就いて」(vom Beruf des deutschen Schriftstellers)、「プラターテン・トリスタン・ド・キホーテ」(Platen-Triстан-Don Quichotte)

(六)自傳——「生活略圖」(Lebensabriss)

附記——「生活略圖」は「ノイエ・ルンドシャウ誌」一九三〇年六月號に掲載されたもので、譯者は主として之に従つて前記の紹介文を書いた。また邦譯書には日野捷郎氏の「トオマス・マン短篇集」がある。前掲作品の邦譯名は氏のそれに従つたものが多い。(成瀬無極)

目次

第一部	一
第二部	三
第三部	八
第四部	一五
第五部	三〇
第六部	六五
第七部	七〇

ブッデンブロオク一家(1)

トオマス・マン作
成瀬 無極譯

第一部

一

「何でしたっけね。——何——でしたっけ……」

「さア、どうだつたらうか知ら、可愛いお嬢さん——」

市参事會員ブッデンブロオクの若夫人はクリム色の梅を張つた、直線の、白く塗つた金の獅子頭の飾の附いたソーファに、母堂と並んで坐りながら自分の傍の肘掛椅子に腰を下ろしてゐる夫の方へちらと一瞥を與へて、窓際の祖父の蔭の上に抱かれてゐる自分の娘に助太刀をしたのである。

「トオニーや！」彼女が言つた、「我は信ず、神我を——」
して、當の幼い娘のアントオニは今年八歳で、體つきの花車な、極く軽い、動く度に色の變る絹で作つた可愛い服

を着て、綺麗なブロードの頭をお祖父さんの顔から心持ちそむけたまゝ、一生懸命に記憶を喚び起しながら、ぼんやりと、灰がゝつた碧い眼で部屋を見凝めて今一度繰り返すのだつた、「何でしたっけ、」それからゆつくりとした口調で、「我は信ず、神我を」と言ひ出すと顔色を輝かしたまゝ早口で附加へて行つた、「——我を創り給ひぬ、生きとし生ける者と共に、」と俄かにすらくと激みなく記憶がたどれて、丁度紀元一千八百三十五年に位高い賢明な元老會の協賛の下に新しい校訂を加へて出版された宗教問答書通りに間違ひなく、その一齣全體をいそ／＼と一氣に唱へ通したのである。いつたん調子づいて來ると、冬、兄弟たちと小さい手籠に乗つてあの「イエルザレムの山」を滑り降りるやうな感じと少しも變りは無い、と彼女は心中に考へた。こんな場合は全く考へるなんて暇は無くなるのだわ、さうしてたとひ止まりたいと思つたつて止めることは出来ない

ものなのだわ。

「更に衣服と靴を」と彼女は續けた、「食物と飲み物、家屋敷、妻と子、畑と家畜をも創り給ひぬ……」然し此の文句を聞くに老ヨハン・ブッデンブローク氏は思はず噴飯するのであつた。今までそつと用意しておいた持ち前の朗かな複雑な忍び笑ひである。彼は宗教問答書を冷かすことが出来る嬉しさの餘り笑つたのであつた。さうして又恐らくはその目的の爲めにこんな簡単な問答を行つたのであらう。彼はトオニーの畑と家畜を尋ね、小麦一袋をいくらで賣るかと尋ねたり、果てはお前と取引をしようかなぞと申し出た。いかに努力しても意地の悪い表情をすることが出来ないままに柔らかなほのり紅味がゝつた彼の顔は、雪のやうに白く粉を振りかけた髪で縁取られてゐる、さうして形ばかりの小さい鬚らしいものが鼠色の上衣の廣襟の上へ垂れてゐる。七十の歳になつても彼は自分の青年時代の流行に決して不忠實な人ではなかつた。たゞ鈕と大きなポケットとの間の紐縁だけは除つてしまつてゐるが、生れてからつひそ一度も長ズボンを身につけたことが無い。眞白なレースの飾襷のある襦袢の上には、二重に括れた廣い頤が何の苦

勞もなさうにゆつたりと載つてゐる。

家族一同も彼と一緒に笑つた。それは主として一家の長上に對する敬意からである。マダム・アントワネット・ブッデンブロークは、デュシャン家から縁附いた女であるが良人と寸分違はぬくすく笑ひをした。夫人は白い捲髪を房々と耳朶の上に束ね、質素と控へ目とを自ら見せてゐる、飾の無い、黒と銀鼠の縞の服を着込んだ肥り肉の婦人だつた。さうしてこの齡になつても、膝の上で天鵞絨の小さい手提げを持つた手は相變らず綺麗で白い。彼女の目鼻だちは年の經つにつれて不思議にも良人のそれとそつくりになつて來た。唯、彼女の目の切れ方と生々した黒眼ばかりが夫人が半分南歐の血を享けてゐることをほのめかしてゐた。彼女は祖父の方からはフランス系瑞西の血をひき、生れはハンブルクであつた。嫁にあたるコンズル夫人エリーザベット・ブッデンブロークは、クレীগエル家の女で、クレীগエル家式の笑ひ聲を立てた。その笑ひ方はブツと噴き出す唇音で始まり同時に頤を胸許へ押しつけるのである。彼女は、クレীগエル家の人々が皆さうであるやうに、極めてエレガントで、美人と呼ばれる程で無いにしてもその澄んだ

しんみりした聲と、落着のある危つ氣の無い、和やかな身の舉措とは、會ふ人毎にすつきりした頼もしい感じを與へた。頭の天邊で小さな王冠型に結び上げ、兩の耳の上へ平たく鍔で捲毛を作つた赤味がゝつた髪の毛に、小さな雀斑がところ／＼にある、人並はづれてデリケートに白い肌の色が相應してゐた。こゝろもち長すぎる鼻と小さい口をした彼女の顔の中で特に人目を惹くのは、下唇と頤との間が全くのつべりとして窪みの無いことだつた。思ひ切り膨らみをとつた袖付の短い胸衣は、匂やかな淡色の花模様様の絹布で出来たびつたり體に合ふ上衣に重ねられて大きなきらきらする寶石を幾つも鍔めた繻子の頸飾の懸つた、完全に美しい襟首を露はに見せてゐた。

コンズルは肘掛椅子に坐つたまゝ心持ち神經質に體を動かして前屈みになつた。彼は幅廣の折返しと、手首のところまで來て始めて絞つてある先太の袖の附いた肉桂色の上衣を着込んでゐる。びつたりしたズボンは洗濯の利く白地の布で、表面には黒い縦縞がついてゐる。頤に密着した糊の強い高襟の襦袢に巻きつけた厚い幅廣の絹のネクタイは染分のチョッキの胸明全體を蔽つてゐた……彼は心持ち窪ん

だ、注意深い、碧い、父親そのまゝの眼をしてゐた。その眼の表情は父のに比べて或ひは一層夢想的だつたかも知れないが、顔の造作は一層眞剣で鋭かつた。鼻は太く鉤なりに飛び出してゐる、それから中程までブロードの縮れた上髭がはね上つてゐる兩頬は、父のよりはずつと膨らみ方が少いのであつた。ブデンブロオク夫人は嫁の方を向いて彼女の腕を抑へくす／＼笑ひながら、彼女の膝元を眺めて言つた。

「おぢいさん不相變ね……」この不相變(Immer)を彼女は「Change」と云ふやうに發音した。コンズル夫人は黙つていなやかな手を舉げて脅すやうにすると金の腕環がかすかに鳴つた。それから彼女獨特の手つきをして口許から贅の方へはつれを直すやうにして、撫で上げた。

コンズルは好意の微笑と非難とを一緒くたにしたやうな聲で言つた、——「お父さま、あなたは不相變一番神聖なことを笑ひ草になさるのですね！」

この人々は「風景の間」に集まつてゐた。メング通のただつ廣い古い館の中の二階である。少し前にヨハン・ブデンブロオク商會が買ひ取つて、家族が住み込んでから長く

經たない家なのだ。

空間によつて外壁から離されてゐる丈夫な弾力性の掛毛氈は床に敷かれた薄手の絨毯のやうに色彩もほんのりと廣大な風景を描出してゐた。それは十八世紀趣味の牧歌的畫面で、陽氣な葡萄摘みや、勤勉な農夫や、可愛らしくリボンを結んだ羊飼の娘達を酷出したものだつた。彼女たちはきら／＼輝く水の畔で小綺麗な仔羊を膝に抱いたり、好いた羊飼の男たちと接吻を交したりしてゐる……。これらの畫面を支配するものは大い黄色が、つた落日の氣分で、それは白塗の家具の黄いろい上被と雙の窓のまへの黄いろい絹の窓掛と調和を保つてゐた。

室の大きさに較べると家具の数は多いことはなかつた。細い、眞直な、脚に金の飾をあつさり、施した圓卓はソファの前に据ゑられずに、蓋の上に笛の臺が載つてゐる小さい風琴と向き合つて、ソファと反對の壁に置いてあつた。又壁に沿つて規則正しく並べられた頑丈な肘掛椅子の外には窓際に小さい縫物用の卓が一つと、それからソファに向き合つて細々した置物を並べた花車な裝飾書机があるばかりだつた。窓と反對の硝子扉を通して薄暗い柱廊が見渡さ

れ、左手には、食堂へ通ずる高い、白の開扉があつた。他の壁際には半圓形の壁龕の中にび／＼光つた鍛鐵で出来た、精巧な籠目細工の扉の背後に熾盛の火がバチ／＼燃えてゐた。

それは時節よりも早く寒くなつてゐたからである。戶外ではまだ十月の半ばだと云ふのに街の向う側のマリア教會の庭を取り巻く小さい菩提樹の葉が黄いろく、すがれてゐたし、この寺の豪壯なゴチック式の隅や角にも風はひ／＼ひ／＼吹つて吹き廻り、細かい冷たい雨がじめ／＼降るのだつた。ブデンフロク夫人、そのお年寄りの方の爲めを思つて二重窓がもう嵌めこまれてゐた。

それは木曜日で、一家族の者が規則正しく二週間に一度はきつと寄り合ふ日であつた。ところで今日は、市中に家を構へてゐる一族の他にも一三人の親しい人たちを極く簡単な中食に請じたのであつた。それで午後四時も近づいた今、家族は迫り来る薄暮の中に坐つて客を待つのだつた……

お嬢さんのアントニエは彼女の所謂機滑りの調子がついてお祖父さんの言葉に構はず、たゞ口を失はして、いつも